



建設業による地域振興の最前線 ～地域愛と挑戦でつなく揖斐の未来～

株式会社久保田工務店

はじめに

近年、気候変動や格差拡大といった地球規模の問題に対する危機感から、持続可能(サステナブル)な社会の形成を模索する動きが世界全体で広がっている。

こうした動きに対し、より多くの企業がこれからの一歩を考え踏み出すために、本シリーズでは本業を通じてサステナブルな社会の実現に向け挑戦する先行企業を取り上げる。

第18回は、岐阜県揖斐川町にある株式会社久保田工務店(以下、久保田工務店)を紹介する。土木・建築を主業とする同社は、道の駅の運営をはじめとした、地域を盛り上げる取り組みを幅広く展開している。地域密着の建設業によるまちづくりの最前線を追った。

揖斐川町坂内のランドマーク 「夜叉ヶ池の里さかうち」

揖斐川町の中心市街地から車を30分ほど走らせた先に、坂内地区の道の駅「夜叉ヶ池の里さかうち」(以下、「道の駅」)はある。岐阜と滋賀の県境に位置し、周囲はのどかな里山風景が広がる。

木のぬくもりが感じられる駅構内には、揖斐の豊かな気候風土の中で育てた農産物、特産品や手作りの民芸品など、思わず手に取ってみたいくなる

品々が並ぶ。

レストランでは、地元産の鹿肉を使ったジビエを楽しむことができる。ジビエは低脂質、高タンパクであり健康食として注目を集めている。人気メニューにはジビエラーメンやジビエステーキ丼があり、ステーキ丼は鹿のロース肉をふんだんに載せた贅沢な一品。肉は柔らかくあっさりしていて、噛めば噛むほどまみが広がる。

道の駅では平日にもかかわらず、お土産物を買求める人や、ここでしか味わえないグルメに舌鼓を打つ人で

にぎわっていた。

坂内の人たちは、「道の駅に活気が出てきた」と、口々にそう言う。この活気を仕掛けたのは、道の駅の運営管理を行っている久保田工務店だ。

第二の故郷・坂内への恩返し

久保田工務店は1949年創業。まちのインフラを守る建設会社として、70年以上にわたり、揖斐に暮らす人々の生活に寄り添ってきた。

同社による夜叉ヶ池の里さかうちの運営は、2019年、揖斐川町から指定



夜叉ヶ池の里さかうち



株式会社久保田工務店
代表取締役社長 久保田 智也氏

管理の依頼を受けたことをきっかけに始まった。「坂内はわが社の第二の故郷。よくぞうちに声をかけてくれた」と、3代目の久保田智也社長は振り返る。

揖斐川町の山間にある坂内地区は、同社と古くから関わりの深い地である。1959年の伊勢湾台風で同地区が甚大な被害を受けた際、創業者の久保田一馬氏がキャタピラーを駆り、決死の覚悟で現地に赴いたという話は、社内で語り継がれる有名なエピソードだ。

「創業者の祖父も先代の父も、坂内の人たちと密な関係を築いていま

した。私も坂内の人たちと交流を深め、これまでお世話になってきた恩返しをしたいと思っていましたので、指定管理のお話をいただいた時は『ぜひやらせてください』と即答しました」。

夜叉ヶ池の里さかうちは2003年に開駅し、久保田工務店が指定管理を受けた時点で15年以上経過していた。客層は地域住民や一時休憩で立ち寄り道路利用者などに限定されており、「盛り上がりは欠け、ただ漫然と運営している状態だった」と久保田社長は明かす。

道の駅に活気をもたらすためには、駅自体の魅力を高め、訪れたい場所にする必要がある。しかし、同社にはこれまで小売や飲食といった事業を手がけた経験がない。

同社は「道の駅を単なる通過点ではなく目的地とすること」を目標に定め、手探りの状態で道の駅運営をスタートさせた。

さかうちマルシェの開催

お客様に実際に足を運んでもらわないことには、道の駅の魅力は伝わら

ない。そこで同社は、マルシェの開催を企画した。しかし、イベント運営についても経験がない。

最大の難点は出店者の募集だった。出店してくれそうな人への伝手がほとんどない。そこで同社は、地元でキッチンカーを有する事業者や、マルシェに参加経験のあるお店へ、出店を打診して回った。

また、各地のイベントやマルシェへ毎週のように足を運び、主催者や出店者と積極的に交流を図った。彼らが豊富に持つ人脈を借りられないかと考えたためだ。こうした努力を重ね十分な数の出店者を募ることに成功するとともに、次回以降のマルシェ開催に向けた出店者募集の土台も形成することができた。

他にも、チラシやポスターの作成、新聞折込やSNS等を通じた発信、備品の手配や設営など、専担社員が中心となり準備を進め、2020年11月、第1回目となる「さかうちマルシェ」が開催された。

当日は地元の事業者が飲食や雑貨などのブースを構えたほか、ワークショップなどの体験や創業相談窓口な



道の駅構内の物販エリア。目に付きやすいよう農産物のエリア(写真奥)を単独で設けるなど、レイアウトにも工夫を凝らす。



さかうちマルシェの様子

ども企画。天候にも恵まれ、コロナ禍にも関わらず、約800人もの来場者が訪れた。駐車場が満車となってしまう、急遽スタッフが会場とのピストン輸送を行うほどの盛り上がりを見せた。

「地元の人たちからは『こんなに坂内に人を集められるんだね』と驚かれました」「イベントは初めてでしたが、やってみるとおもしろいですし、お客様の喜ぶ顔を間近で見ることができました」と久保田社長。

マルシェはその後も毎年開催しており、来場者が2,000人を超えた年もある。

また、2022年からは坂内の伝統的な祭りである「夜叉ヶ池伝説道中まつり」と合同で開催している。実行委員会からの打診により実現し、コロナ禍で2年連続中止となっていた同祭のにぎわい復活の一翼を担っている。

ジビエで地域の魅力発信

道の駅の目玉の1つが、冒頭でも紹介したジビエだ。

同社は2019年、道の駅と合わせ、駅近くにある「揖斐川町ジビエ解体処理施設」の指定管理も受けた。これにより鹿（個体）仕入れから、解体処理、加工、販売までの体制が整い商品開発にも積極的に取り組んでいる。これまで開発した商品は、有名シェフや人気店とコラボしたハンバーグやラーメンなどの本格グルメ、ジャーキーやソーセージなどお土産にぴったりの加工品、メンチカツなどの軽食まで多岐にわたり、道の駅のレストランや売店、通販サイトなどで販売している。

ジビエが道の駅の集客に一役買っているほか、近年深刻化する鹿の獣害対策にもつながっている。

2023年からは、地元の揖斐高校と連携した商品開発を行っている。デュアル実習先として提携している縁から始まった試みで、授業の一環として生徒が考案した鹿肉を使ったメニューを、道の駅等で販売している。

久保田社長は、「自分たちが考えたものがお客さんのもとに出ることが、生徒さんたちにとって大事な成功体験になれば嬉しいですし、ジビエの取り組みを知ってもらうことで、自分の生まれ育った地域を大切にするという感覚を養うきっかけになれば」と話す。

道の駅を地域活性化のプラットフォームに

2023年3月には道の駅のレストランを改修し、さらに居心地の良い空間にリニューアルした。物販の陳列ブースも、おすすめの商品が目につきやすくなるよう作り変えた。

同年11月には国道417号冠山峠道路の開通をきっかけに、福井方面の往来客も増加。福井県にある道の駅とのコラボイベント開催や福井でとれた海産物の販売など、県境を越えた道の駅同士の連携も行っている。

集客は徐々に伸びてきており、同社が最初に掲げた「道の駅を通過点でなく目的地にする」という目標は達成に近づいている。

駅を担当するスタッフにもプラスの変化が生じており、

「勤務や接客の雰囲気がとても明るくなりましたし、モチベーションが上がっていると感じます」と久保田社長。

道の駅運営は、建設業を生業としてきた同社にとっても、貴重な経験となっている。「我々は本業では公共工事を請け負うことが多く、実際にお客様の声を聞く機会がほぼありません。しかし道の駅では、お客様の表情や声に直に接することができるので、非常に分かりやすい手ごたえがあります。チャレンジしてみてよかったですし、これからも取り組みを継続していきたいと考えています」と久保田社長は話す。

フィールドが広がるまちづくり事業

道の駅運営やイベント開催、ジビエ商品の開発により、坂内地区を中心としたにぎわい創出に貢献している久保田工務店。

近年、同社はこうしたまちづくりに係るビジネスを強化。フィールドを揖斐全体に広げている。

なかでも同社が注目しているのが空き家活用だ。揖斐川町の空き家比



人気メニューのジビエステーキ丼。地元産の鹿肉を使用。

率は約20%と県内でも高水準にあり、空き家数は今後も増えていくことが予想される。同社は今年7月、登記・測量事務所と共同で、「Ibikara(いびから)」と名付けた空き家相談窓口をスタートさせた。他にも空き家イノベーションによるオフィス誘致や商業施設への活用など、様々な形の空き家活用プロジェクトを仕掛けていく方針だ。

また、同社は地元小中学校の子どもたちとの交流を通じて、建設業の仕事を理解してもらったり、道の駅やジビエなど地域振興の取り組みについて紹介している。

「建設やまちづくりを将来の夢の選択肢に加えてもらいたいという狙いの1つではありますが、必ず伝えているのが、『なんとなくで進路を選ばないこと』と『一日一日を無駄にしないこと』です。揖斐の子どもたちには、自分で考えて選んだ道を、堂々と歩んでいける人になってほしいですから」と久保田社長は話す。

他にも少年サッカーの大会「ibikit CUP(イビキット・カップ)」の開催など、揖斐を盛り上げる取り組みを多角的に展開し、まちづくりの可能性を模索している。

地域愛が突き動かすまちづくり

揖斐の発展に貢献するために日々邁進する久保田工務店。

そのエネルギーの源は何かと尋ねると、久保田社長はまっすぐな目でこう答えた。「地域愛です。揖斐が好きだし、揖斐に感謝しているからこそ、揖斐を盛り上げていきたい。ただ、それだけです」。

このひたむきな地域愛は同社特有

のものではなく、揖斐の伝統的な風土なのだという。

「揖斐の人は根本的に揖斐が好きなんです。揖斐に対する熱い気持ちが代々つながってきたからこそ、いま揖斐に生きる私たちも、自然と揖斐を愛するようになったんだと思います。だから私も地域愛を、次の世代につなげていきたい」。

まちづくりに取り組む理由は他にもある。同社では特に公共工事が売上の大半を占めるが、公共工事は人口減少に伴い縮小することが見込まれている。会社の将来のためにも、公共工事一辺倒の現状を脱し、まちづくり事業などの比重を高めていく必要がある。

「まちづくりはもちろん地域愛が出发点ではありますが、思いを抱くだけでなく実際に行動し、かつ企業として利益が出るようにしなくてははいけません。そのためにも、新しいまちづくりの取り組みに、ますます力を入れていきたいと考えています」と久保田社長。

同社のまちづくり事業のスタンスは、「外の世界とつながっていくこと」、「何でもやってみること」、「目に見える形で発信し続けること」だ。

「会社を飛び出して、何でもチャレンジしてみると、そこに必ず人が絡んできて、新しい方向へと向かっていく。それをイベントやメディアといった、目に見える形で発信し続ければ、人との接点が増え、地域を盛り上げる動きが大きくなっていく。これは私の経験上、間違いないことです。社内で『こんなまちづくりの取り組みがしたい』という要望があれば、どんどんやってみよう促すことにより社員のやりがいにもつなげ、

会社の風土としても根付かせたいと思っています」と久保田社長。

「わが社では『Challenge to Change』を社是に掲げています。時代とともに変化する地域の課題に応えるために、建設業の枠にとらわれず、幅広い分野にチャレンジしていく。困りごとがあれば『久保田工務店に相談しよう』と思ってもらえるような、地域に頼られる会社を目指し続けます」。

おわりに

久保田工務店のまちづくりの行動原理は、揖斐に対する「地域愛」に凝縮されている。建設業を主とする同社が地域のために尽力する姿勢は、ただの事業活動にとどまらず、深い愛着と熱意に裏打ちされている。

しかし、地域への愛着があっても、実際に行動に移すのは簡単なことではない。経験がなくても挑戦し続ける人は、どれほどいるだろう。同社はそのような挑戦を厭わず、道の駅の運営、イベント開催、ジビエの商品開発、空き家活用など、建設業の枠を超えた多様な事業に果敢に取り組んでいる。社是のもと、変化を恐れずに前進する姿勢がまちづくりに強く表れている。

また、同社は地域の未来を担う子どもたちに、揖斐のために奮闘する姿を示し続けている。この姿勢は、揖斐の人々が代々受け継いできた地域愛を次の世代へとつなげていく使命感に支えられている。

地域愛、挑戦、次の世代への継承。この三つの要素が、持続可能な地域社会の実現へと導く鍵となる。

(2024.8.21)

OKB総研 調査部 梅木 風香